

【導言】 原作の時期の感覚で古典の表現を読み取る

「導言」は、それぞれの章の内容をよく理解していただくための、いわば準備体操です。ここでは、まず、だれも疑っていない『古今和歌集』の現行の解釈が、実は、たいへん危ないものだという現実を認識していただきます。

『古今和歌集』を読んでみたいと思つたら、あるいは、そのなかの特定の和歌の正確な解釈を知りたいと思つたら、たぶん、書店や図書館で注釈書を探すでしょう。いくつもあるので、どれにしようかと迷つたら、校注者の肩書きや出版社の知名度、あるいは、全文現代語訳つきかどうかなどを選択の決め手にするかもしれません。しかし、まさかつぎのような意見があるとは思いません。

いまだに古今集の注釈はダメです。ほとんど読めてません。それは、万葉第一主義で読むから。それでは、ぜんぜん意味がなくなってしまうわけです。(略) 古今集を読むためには、濁点を用いない仮名文字のみの連綿表

記に籠められた工夫、特に第三句の活かし方について勉強しなければなら
ない。(略) これはもうはつきりいつておきますが、古今集はいまだに読
めていない。

〔谷沢永一「万葉・古今・新古今、その違い」(谷沢永一・渡部昇一『人生後

半に読むべき本』PHP研究所・2006)〕

「古今集はいまだに読めていない」としたら、注釈書の選択に迷ったりすることは意味が
なくなりますが、まさかそんなはずは、と考えるのがふつうでしょう。すくなくとも注釈書
を書いたかたがたは、読めていると思つてははずです。「読めていない」などというのは
独善的な放言だと考えるなら、研究者のプライドを賭けて正面から反論すべきです。引用が
長くなるので省略しましたが、右の発言のあとには、論拠となる実例が挙げられています。も
し、それに反論できないなら、すみやかに軌道を修正すれば済むことです。言いたいだけ言
わせておけばよい、ほおっておけば自然に鎮火するはずだという姿勢を貫くべきではありません。
せん。この領域の進歩を阻んでいるのは、不都合な批判を黙殺する前近代的体質です。

右に引用した現状認識の表明が無責任な放言ではなく、学界の保守的伝統を憂えた、齒に
衣を着せぬ批判であり、痛いところを衝いておられるとしたら、そして、それが、『古今和歌集』
の和歌だけにとどまらない、もっと根の深い問題だとしたら、古文の時間に疑いをいだかず

に習い覚えたこと、また、自信をもって教えてきたことはどうなるのかという深刻な事態に
ならざるをえません。その波紋は、日本の古典文学を愛する一般の人たちよりもより、中
学、高校の生徒や担当教員のみなさんから、大学や大学院の学生、さらには、当然ながら、
大本の専門研究者にまで及ぶこととなります。ちなみに、右に引用した対談には、「学界は
どんな本を無視するか―谷沢」という一節もあります。いずれにせよ、この問題提起は、
『古今和歌集』をはじめとする古典文学作品研究の根本的なありかたに関わりますから、明
確な根拠なしに軽々しくどちらかの側についてすべきではありません。

以上のような問題意識のもとに、本書では、このあとに続く四つの章で『古今和歌集』を
はじめとする平安前期の仮名文学作品のテクストにみえる表現を丹念に解析し、第五章で
は、『方丈記』冒頭に使用されているウタガタという語の正体を解明するために、『万葉集』
およびそれ以前に遡り、また、明治期の辞書まで下って詳細な検討を試みます。

本書にいう平安前期とは、第二章以下に指摘する仮名の特性を生かして和歌や物語が書か
れていた九世紀から十一世紀ごろまでをさします。具体的には、仮名だけで和歌が作られて
いた時期が平安前期、自作の和歌に漢字を交えて書くようになった時期が平安後期です。そ
のように区分する根拠は、第二章以下の検討をつうじて理解していただけるはずです。

このイントロダクションでは、「ひとはいき、こゝろもしらす、ふるさとは、はなそむか

しの、かに、ほひける」〔百人一首〕という紀貫之の有名な和歌を例にして、現行の注釈書や古語辞典に共通する致命的な問題点を指摘し、作者の意図を過不足なく読み解くための筆者の方法を提示します。

本書全体をつうじて、注釈書や古語辞典の現代語訳をしばしば引用し、解釈上の問題点を指摘しますが、それは、表現解析の誤りが現代語訳に端的に表われているからであつて、現代語訳そのものを重視しているわけではありません。大切なのは、それがどういふ表現であるかを正確に説明できることであつて、古典文法でつじつまを合わせた現代語訳を作成することではありません。むしろ、きちんと理解したらあまりにギャップが大きすぎて、現代語訳などできなくなるのが平安前期の和歌であることが、読み進むうちにだんだん理解していただけるはずで、当然ながら、それに代わるべき筆者の正しい現代語訳を示すことはありません。ケチを付けるだけで決してほめないなどと批判しないでください。右に述べた筆者の立場からすれば、ほめることのできる現代語訳はないので、そういう結果にならざるをえないからです。

もうひとつお断りしておかなければならないのは、引用した用例に、目前の問題とは無関係の、脱線と疑われかねない詳しい説明をしばしば加えることです。ふつうなら、へほかに、つぎのような用例がある」と、用例だけ引用して済ませてしまふところですが、本書で

は用例の解釈に踏み込みます。なぜなら、きちんと解釈できなければ引用する意味がないし、解釈を誤って引用したら傷はもつと深くなるからです。我々にとつて大切な心がけは、急がば回れ、です。

I. 予備知識なしに読めるバリアフリーの専門書

平安時代の仮名文学作品を中心に据えて、古典文学作品のテクストの表現を的確に読み取る方法を根本から考えなおしてみようというのが本書の目的です。根本から考えなおしてみようとは、筆者が、現在の状況に大きな不満を抱いており、抜本的改革が必要だと考えていることを意味しています。著名な仮名文学作品のなかの、高校の古文教材としても好んで採択されている部分にさえ、誤った解釈が確固たる共通理解として定着している事例がたいへん多いのは、それぞれの専門研究者が、重大な過ちをおかしていることに気づいていないからです。少数ながら洞察に満ちた注釈書があることはせめてもの救いですが、現在の嘆かわしい研究水準は、大部分の注釈書や古語辞典の類に如実に反映されています。

筆者がここで問題にしているのは、作品論や作家論などではなく、テクストの表現を、作者によつて意図されたとおりに過不足なく理解するという、もつとも基礎的段階の解釈です。過不足なくというのは究極の理想であつて、現実には、少しでも誤差を縮めてゆく作業の繰り返しになりますが、その作業を可能にするためには有効な方法を開拓しなければなり

ません。誤差の有無の厳密な検証も不可欠です。

仮名文学作品の研究にはすでに長い伝統があり、研究にたずさわってきた人たちも膨大な数に上るのに、初歩的な誤りにさえだれも気づかないまま堂々巡りをしているのは、勘を頼りに手探りしてきたために、さまざまの解釈が横並びに際限なく広がるばかりで、レベルの向上が指向されていないからです。

方法のないところに方法を確立しようという試みですから、ゼロからの出発です。その意味で既成の専門家はいませんから、仮名文学作品の表現を的確に理解したいと考えている社会人のかたがたにも、学部や大学院に在籍している学生のみなさんにも、高校で古文を担当している教員のみなさんにも、そして、大学などで国文学や国語学の専門的講義を担当しているみなさんにも、これまで身につけた知識を白紙に戻して議論に参加していただきたいというのが筆者の希望です。

本書のコンセプトは、仮名文学作品に関心をもつ人たちならだれでも読めるバリアフリーの専門書ということです。ただし、平安文学や和歌文学、日本語史などにまたがる、これまでなかった新しい分野ですから、ナントカ学とは命名しないでおきます。創造的かつ啓発的で、研究水準の向上に役立ちさえすればよいし、方法に独自性がなければ、ナニニ学と命名して格好をつける値打ちはありません。本書を啓蒙書や一般書ではなく専門書として位置

づけるのは、現行の注釈書や古語辞典などの、目に余る誤りを正すとともに、誤りの根源に方法の欠如があることを実例に基づいて指摘し、本書のめざす文献学的アプローチの有用性を客観的に証明しようとするものだからです。

読んでみよう、という前向きな姿勢があれば、特別の予備知識がなくても理解できるように、それぞれの分野の研究者にとっては釈迦に説法の初歩的解説を随所に交えながら叙述します。ソフトカバーにして多めに振り仮名をつけるのも、デスマス体で叙述するのも、できるだけ多くのかたがたに筆者の考えかたに親しみをもっていたいただきたいと願うからであって、暇つぶしの読み捨て本を書くつもりはありません。

内容がおもしろそうでなければ、読む気になれません。筆者が目指しているのは、遺跡の発掘と同じように、ワクワクしながら読んでいただける本です。発見の興奮が読者にそのまま伝わるように書く、ということです。これは、筆者が大学院に入学した直後の学会でお会いして以後、他界なさる間際まで新鮮な刺激を与えつづけてくださったハムブルク大学の ギューンター ヴェンケ Günther Wenck 教授 (1916-1992) が著書 *The Phonemics of Japanese. Questions and Attempts*. Wiesbaden, 1966. (『日本語音素論』) の注に書き残したことです。「もろもろの疑問と、それらを解決するためのもろもろの試み」という副題は、本書にもそのまま当てはまります。

筆者が伝えたいのは、筆者自身が経験した発見の喜びであり、この喜びは、順序をきちんと

踏みさえすれば、だれにでも味わうことができるものだということです。博物館に整然と陳列された古代の壺や装飾品などは感動的ですが、そのひとつひとつは、特定の人物が胸ときめかして発掘したものなのです。その喜びは、発掘した人物だけの特権です。

明白な読み誤りや、まるで見当はずれの説明が、高校の教科書にも、大学や大学院の講義にも、古語辞典の解説にも満ちあふれています。本書では、そういう実例を取り上げながら、現今の共通理解の誤りを指摘し、筋道を立てて、より真実に近いはずの解釈を随所に提示します。厳密な方法に基づく検証が、お茶のみ話に毛が生えたような現今の解釈とまるで違う、テキストの繊細な姿を見せてくれることを期待してください。本書で導かれる帰結が究極の真実ではありえないにしても、現状における望ましい方向づけであると筆者は確信しています。

高校の古文教育をはじめ、大学や大学院の講義まで間違いだらけだとしたら、確実な解釈をめざした正統の試みによって導かれた帰結が、一部の専門研究者によって握りつぶされてしまうのは残念なことです。提唱者にとって残念であるだけでなく、貴重な文化遺産である仮名文学作品のテキストが、既存の研究者の面子を潰さないために光を浴びる機会を奪われ、冬眠状態に留められていることが残念でたまりません。伝統的国文学や国語学にとつての緊急の課題は偏狭な縄張り意識セクシヨナリズムからの脱却です。

Ⅱ. 本書のアプローチ

筆者は、学生の身分を離れてから今日まで、日本語史関連の講義や演習を担当してきましたが、特定の専門領域をみずから決めることはしていません。もし、専門があるとしたら、その時その時に取り組んできた課題が、そして現時点では本書で取り組んでいるこの課題が専門なのかもしれません。これまでに執筆した単行の著作については本書の奥付を参照してください。論文やエッセイの類は含まれていません。一九九〇年代以降の仕事は、仮名文テクストの表現解析に大きく傾いており、本書はそれらの延長線上にあります。

目の前にある過去の文献に、どのような事柄が、どのように書かれているかを的確に読み取るためにはどのようなアプローチが有効であるかを、筆者は一貫した課題として追究してきましたが、個人が対象にできる文献の数は限られているので、特定の文献に集中して取り組むことなるべく多くの文献に応用可能な方法を見いだそうとしてきました。そういう目的に適合する条件をそなえた対象のひとつとして『古今和歌集』を選び、平安時代の他の仮名文学作品も視野に入れて多角的に検討し、導き出された成果を折々に公表してきました。しかし、筆者のアプローチは、伝統的国文学や国語学の手法と質的な隔たりがあつて保守的な研究者に理解されにくいだけでなく、現行の共通理解を根底から問いなおすものであるために、事実上、無視されている状態にあり、セクシヨナリズムの壁の厚さを実感していま

す。気に入らなければ反論せず黙殺するという、古代中国に端を発する東アジアにおける人文学の伝統的体質が、この世界では二十一世紀の今日も脈々と受け継がれています。

伝統的国文学や国語学の枠を越えて、本書では、巻頭に例示したような平安時代の古筆^{こひつ}にまで対象を広げますが、目前の課題が現在の専門だという立場をとる以上、取り上げた事柄に関する限り、書家ではないし書道史が専門でもないから、という言い訳をあらかじめ用意するつもりはありません。

注釈書は、その作品の隅々まで対象にしなければならぬので、血の滲^{にじ}むような努力が必要でしょう。そういう努力の成果が間違いだらけだと指摘されたら嬉しいはずがないことは、筆者も十分に理解しているつもりです。しかし、ひとつの仕事はつぎの仕事によって更新され、それがさらに更新されるといふ過程の積み重ねによらなければ水準の向上は期待できません。そのことを互いに理解しあえる日が来ることを筆者は切に望んでいます。先行する注釈書よりも進歩していなければ、もうひとつの注釈書を世に出す意味はありません。大切な文化財の真の姿を覆い隠している泥やほこりを協力して取り払いましょう。

筆者が熱い期待を寄せているのは、すでに一家をなしている専門研究者よりも、その道に関心のある、あるいはその道に進もうとしている新しい世代の人たちです。教員や研究者を目指している人たちはもちろんのこと、一般の読者にもぜひ積極的関心をもってほしいと切

望して本書を書くのは、日本の古典文学作品が、日本の、あるいは日本人の、という枠を超えて、人類の貴重な文化遺産だと信じて疑わないからです。

初心者にも手が届くバリアフリーの専門書として本書を位置づける筆者の意図が、これだけ理解していただけたでしょうか。

バリアフリーを心がけても、従来の研究のどこにどのような誤りがあったかを十分に納得し、それに代わるべき新しいアプローチのメリットを認識していただくためには、最小限の専門用語を使わざるをえません。そういう場合には、その場、その場でわかりやすく説明するだけでなく、巻末に「キーワード索引」を添えて検索できるようにしておきます。

専門用語などと言うと排他的に聞こえますが、気にすることはありません。難しい数式が出てくるわけではないし、扱う対象は日本語で書いた作品のテキストですから、その気になれば、年齢や経歴などを問わずに理解できるはず。大切なのは、なにかを説明する場合に、だれでも同じ意味に理解できることばで表現することです。文学作品を対象とする場合にも、独り合点の用語で叙述すると正確な伝達ができません。筆者が定義した用語を一般の国語辞典に解説されている日常的意味に理解しないでください。あとできちんと説明しますが、〈仮名〉や〈平仮名〉などはその典型です。

Ⅲ. 古典文法フリーで日本語の感覚をよみがえらせる

前項でうるさい注文をつけた見返りとして歓迎してもらえそうなのは、初歩の英文法にも出てくる程度の、名詞とか副詞とかいうレヴェルの用語は別として、古典文法独特の、前時代的で難解な用語を持ち込まないことです。使わないように工夫するわけではなく、理不尽なその枠組みに縛られると、わかることまでわからなくなるからです。古典文法をマスターしないと古文は読めないとか、マスターすれば古文が読めるとかいう考えかたを叩き込まれてきた読者は、そう言われてもなかなか頭を切り替えにくいでしょうから、論より証拠。古典文法を排除すると、はるかに繊細な読みかたができる事例を豊富に提示します。その手始めとして、つぎの例を読んで目を覚ましてください。

高校では、古典文法を身につけるために『おぐら小倉百人一首』を覚えるように勧めたり、覚えさせたりしているようです。その風潮を反映して、近年では、どの学習用古語辞典にも『百人一首』の現代語訳と解説とが組み込まれていますが、頼りになるものはなさそうです。

人はいさ 心も知らず ふるさとは 花ぞ昔の 香かに匂ひける

〔百人一首・35・紀貫之〕

『古今和歌集』ではこの和歌に長い詞書がありますが（春上・42）、『百人一首』では詞書が省かれているので、この場合には和歌だけで考えるべきです。『百人一首』のなかでも特に

よく知られているもののひとつなので、現代語訳ぐらいできるという読者も少なくないでしょう。もちろん、知らなくてもかまいませんが――。

あなたは、さあ、(その気持ちは) どうだか知らないが、古くからのなじみの土地では、(梅の) 花は昔どおりの香りで咲いているよ。〔北原保雄編『小

学館全文全訳古語辞典』2004 (以下、『全々古語』「ふるさと」の項)

支離滅裂なこの訳文を理解できる日本語話者は、編纂にたずさわったスタッフを含めて、だれもいないでしょう。学習古語辞典の役割が古文解釈や古典文法を身につけるのを助けることだとしたら、奇妙な表現の前半と後半とが、木に竹を接いだような関係になっていたり、あとで説明するように、「花ぞ」を「(梅の) 花は」と訳したりしていることは致命的です。「その気持ち」の「その」がなにをさすのかわからないし、末尾のケリも、同じ辞書の「けり」の項の解説と整合していません(本書末尾の「補章」)。

山ほどもある『百人一首』の注釈書や解説書のなから、専門の研究者による文庫版をひとつ選んでみましょう。

現代語訳 あなたの方は、さあどうか、お気持ちも知らないけれど、さすがこの旧都奈良では、花の方だけは、昔のままの香で咲き匂っています

ね。〔島津忠夫訳注『百人一首』角川ソフィア文庫・新版10版・2006〕

右に引用した辞書に負けず劣らずひとり合点で意味不明の現代語訳です。そもそも、この和歌に「旧都奈良」が出てきたりするのは、伝統的歌学の「歌枕」を当然のように持ち込むからです。『百人一首』で歌集の詞書を切り捨てたのは、和歌を完結した表現とみなすのが、その撰者、藤原定家の基本的立場だからです。

人の方は、心が変わったかどうか、さあ、わたしにはわかりません。昔泊
めていただいたこの里は、花の方はたしかに昔のとおりの香りがにおって
いますね。

〔小島憲之・新井栄蔵校注『古今和歌集』新日本古典文学大系・岩波書店・1989〕

前引のふたつの現代語訳は「ひと」をアナタと訳していますが、こちらは人間をさすとみなして、下の句の「花」と対比しています。これは『百人一首』ではなく『古今和歌集』の注釈書なので、詞書を取り入れて「昔泊めていただいた」となっています。

「ふるさと」とは、以前になじんでいた懐かしい土地です。作者が、その地で親しくしていた知人に冷たくあしらわれたことは、第二句の「心も知らず」から推定できるのですが、あとで証明するようにこれまでその意味が正しく理解されていませんでした。

冷遇されたことに失望した作者は、咲いている梅の花に気づき、ふるさとは梅の花が間違
いなく昔どおりの懐かしい香りに匂っているのだと心が慰められた、というようなことのよ

うです。しかし、へというような」ですませておいたのでは、表現の核心に迫ることができないので、一語一句にこだわりながら、筆者の方法で読んでみましょう。

ひとは、いさ

平安前期の和歌は、『万葉集』の短歌のように単線的、一回的ではなく、仮名の特性を生かして複雑に構成された表現をゆつくり解きほぐしながら読み味わうように構成されています。

「人」には、大きく分けて、①人間一般をさす用法と、②へヒトに知られたくない、へヒトの傘を借りてきた」などという、当事者以外の人間をさす、日本語独特ともいべき、そして、日本語話者にとつてはごくふつうの用法があります。以下には、②の用法の「人」をヒトと表記します。

「人」とよんだ対象が①なのか②なのか、また、②だとしたら、ダレを、あるいは、どういう人たちをさしているかは、日本語話者なら、場面や文脈から反射的に理解できます。

注釈書や古語辞典などには、「いさ」が、現代語のサテに当たる語だと説明されており、右に引用した三つの現代語訳にも、「さあ」、「さあどうだか」となっていますが、どちらにしても、訳文のなかでそれだけが浮いていて、いかにも取って付けた感じがするのはどうしてなのでしょう。以下の検討から明らかになるように、その違和感こそ、従来の解釈の誤りを根本から正す決定的なカギなのです。